

AI時代、理学療法士に求められる力とは？ — これからの理学療法士に必要な「人を見る力」 —

私たちの生活の中で、AI(人工知能)は急速に身近な存在になっています。医療やリハビリテーションの分野でも活用が進み、身体の動きの分析や患者さんの状態・経過を捉える技術などが研究されています。アプリやロボット、ウェアラブル機器など、その技術はさまざまです。

では、AIがさらに進歩する時代、理学療法士にはどのような力が求められるのでしょうか。

AIを活用しながら、一人ひとりの身体や生活、思いに向き合う「人を見る力」について考えてみましょう。



生成AIにて作成

AIでリハビリはどう変わる？

Sumnerらは、AIの活用について以下のように報告しています。

01 大量のデータを分析

歩行や運動などの複雑なデータを分析し、特徴やパターンを捉える。

02 評価をサポート

データを活用することで、患者さんの状態や変化をより客観的に捉える。

03 離れた場所から見守る

スマートウォッチなどの身につけて使う機器を使って、来院していない間の運動や経過を確認する。

04 一人ひとりに合わせた支援

得られたデータをもとに、個別化されたリハビリを支援する。

多くの情報を分析し、患者さんの状態や変化を客観的に捉えることができます。そのためAIは、リハビリテーションの可能性を広げる技術として期待されています。

参考: Sumner J, et al. Artificial intelligence in physical rehabilitation: A systematic review. Artificial Intelligence in Medicine. 2023;146:102693.

AIがあれば理学療法士は必要なくなる？

AIを活用したリハビリには、さまざまな可能性があります。一方で、実際の場面での効果は、まだ十分に明らかになっていません。だからこそ、AIから得られた情報を適切に判断し、目の前の患者さんにどう生かすかを考えることが大切です。

大切になる「人を見る力」

・身体をみる力

姿勢や動作、筋力などから、身体の状態を捉える。

・考える力

得られた情報から、「なぜ?」「何が問題?」を考える。

・人と関わる力

会話を通して、思いや希望、生活の様子を知る。

・判断する力

さまざまな情報を活用し、その人に合った支援を考える。

「データだけではなく、その人を見る。」

AIから多くの情報を得られる時代でも、患者さんをみて、考え、関わることは理学療法士の大切な役割です。

本校での取り組み

本校では、知識や技術を身につけるだけでなく、「なぜ?」「どうして?」と自分で考えることを大切にしており、授業や実技では、学生同士で意見を出し合い、さまざまな視点から患者さんの身体や生活について考えます。

AIなど新しい技術が発展する時代だからこそ、情報をそのまま受け取るのではなく、自分で考え、判断し、相手に伝える力を育てています。

学校生活での様子は [こちらから→](#)

Instagramを覗いてみてください。

